

[亜熱帯における農業技術の普及及び経営指導]

パッションフルーツ簡易整枝法の開発

～品質安定と省力化に向けて～

菊池 豊

(営農研修所)

【要 約】 営農研修所で開発したパッションフルーツの簡易整枝法は、従来から行われている平棚を利用した放任栽培やアーチなどを利用した整枝法と比べて、収量性に大きな差はなく、管理作業を規則的に行えることから省力化につながる。

【目的】

小笠原でのパッションフルーツ栽培は、平棚に主枝を2～4本配置し、その後、結果枝となる側枝を空間に配置する放任栽培が主流となっている。この方法では、枝が混みやすいため、管理作業が煩雑になるだけでなく、棚下が暗く日照条件が悪くなる。営農研修所では5年程前から、この問題を解決するため簡易的な整枝法を開発し、パッションフルーツの栽培を行ってきたが、その収量性や省力性を検証する。

【方法】

前年度栽培樹から挿し穂を取り、2008年8月に挿し木繁殖を行った後、11月4日にパイプハウス内へ定植した。基肥は成分量でN-P₂O₅-K₂Oを2-0.8-0.4kg/aとし、追肥は窒素成分量で0.1kg/aを月に3回施用した。結果枝をエスター線に誘引する間隔で、25cm区と30cm区を作り、1区24㎡(4×6m)とした。なお、簡易整枝法は以下のとおりとした。

- 1) 主幹の枝が棚上に伸び、葉が4～5枚になったら摘心し、それぞれの腋芽を4方向に伸ばして主枝とする(図1)。
- 2) 各主枝から発生する側枝を、棚上のエスター線の間隔(25cm及び30cm)に合わせて規則的に両側へ結果枝として配置する(図2)。
- 3) 花芽が誘導される自然日長となった時点(電照栽培では花芽の誘導を確認後)で、伸びていた結果枝を1, 2節残して切り戻す(図3, 4)。
- 4) 結果枝から発生した腋芽は除去し、摘葉は行わない。

【成果の概要】

- 1) 結果枝から出た腋芽を除去するため、無駄な側枝が発生せず、棚下は明るく保たれ、果実にもよく陽が当たるようになる(図5)。
- 2) 摘葉を行わないため、葉面積が確保されると同時に作業時間を軽減できる。
- 3) 結果枝の誘引は、エスター線に沿って行うため、作業が容易になる。
- 4) 花芽が誘導されてから結果枝を切り戻すため、果実は主枝の近くから着果し、棚空間の無駄が少なくなる。
- 5) 開花は結果枝の基から先に向かって起こるため、受粉作業や果実管理を規則的かつ容易に行える(図6)。
- 6) 結果枝の配置間隔で25cm区と30cm区を比較したが、収量などに大きな差はなく、通常管理の収穫量とされる2.5～3.5t/10a程度は確保される(表1)。
- 7) まとめ：簡易整枝法は、通常行われる整枝法に比べ、管理が規則的にできることから省力的であり、収量性や果実品質に遜色がない。このため、成果発表会等で生産者への普及を図り、2009年度には数名の生産者が取り組み始めている。

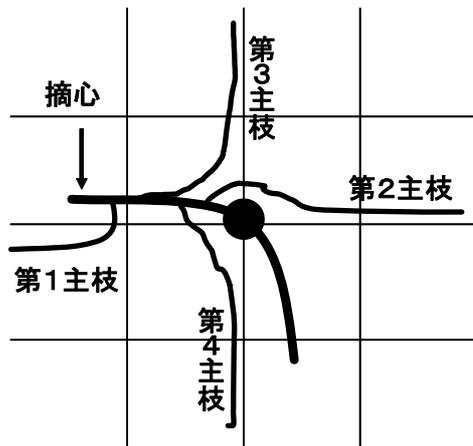


図1 4本主枝の配置方法

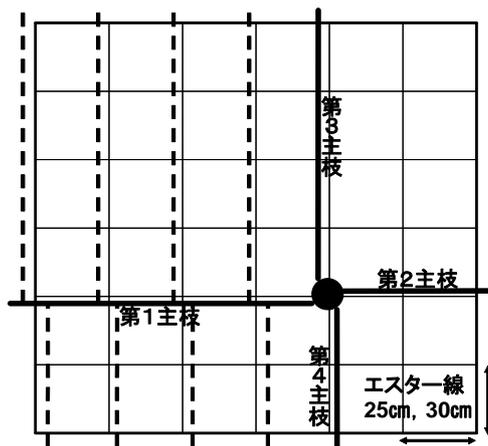


図2 第1主枝の結果枝（点線）の配置



図3 結果枝を切り戻した状態



図4 主枝の結果枝を全て切り戻した状態



図5 枝管理により棚下が明るい様子



図6 果実が一直線に並んだ様子

表1 結果枝の配置間隔の違いによる収量

区	等級 ^a	収穫個数 (m ²)	1果平均果重	収量 (10a)	総収量 (10a)
25cm区	A級	30.6 個	85 g	2.6 t	3.3 t
	B級	7.5	80.4	0.6	
	C級	1.6	65.7	0.1	
30cm区	A級	29.3	86.3	2.5	3.0
	B級	4.3	91	0.4	
	C級	1.7	62.2	0.1	

a) 等級のA級は70g以上, B級は70g以上で軽度のキズや着色不良が見られるもの, C級は70g以下